

映画のすすめ

片場 嘉明

厚生中央病院院長

映画館と呼ばれる建物が、次々と街から消えていったのは、昭和から平成になったころではないかと思う。その頃、古きよき時代の映画館と、そこに集う人々をノスタルジックに描いたイタリア映画、トルナトーレ監督の「ニューシネマ・パラダイス」が話題を呼んだ。街から消え行く映画館への惜別とともに老映写技師とトト少年を軸にした人間模様は、懐古派だけでなく若き世代の胸を打った。懐古派の一人である私には、この作品で描かれた映画館が、うしろに「館」の付いた日本の映画館の消え行く姿と重なってみえたのである。

この映画を観る度に、欧米映画にうつつを抜かしていたガキの頃を思い出す。終戦直後の荒廃した日本では到底だし得ぬ臨場感と存在感が、洋画の世界にはあふれていたのである。ロードショウに行けるのは、お年玉をもらった正月ぐらいで、ふだんは小便臭い2本立ての映画館や名画座を渡り歩いた。どんな場末の映画館でもプログラムは売っており、昼飯代を削ってでも買い求めた。映画を観たあと、プログラムから仕入れたうんちくを傾ける楽しみもあった。古本屋であさった映画雑誌は、すぐに置き場に困り、屑屋にいく運命にあったが、紙4枚程度の薄いプログラムは、たとえ百冊になっても本棚の片隅に寄せておけばよかった。自分が観た映画の確かな証拠として、プログラムだけは捨てるに忍びなかったのである。

映画に対する私の「こだわり」は、ここいらで始まったように思える。

テレビ時代に入り、人並みに

27インチのかいテレビを手に入れ、ホームシアターらしきものを造ってみた。新しい装置がでる度に便利になっていった。旧い映画の録画に夢中な頃、映画とテレビは同じ視聴覚メディアの同輩ぐらいにしか考えていなかった。もはや、映画館に行く必要もなくなったなど、したり顔で自慢をしていた。だが、むさ苦しい部屋で、手前独り、何百本のビデオを見ようが、あの巨大なスクリーンを前にしての饗宴と興奮には、とてもかなわぬことに気付いた。いつの時代も、映画はでかい銀幕に映写されることを大前提とした「一本毎の完結品」ではなかったか。その時プログラムが、

映画とテレビはそれぞれ別の感性と意図のもとに作られていることを、手短かに教えてくれたのである。

若さを失うと、映画という虚構の世界を馬鹿らしいと感ずるようになる。私の場合、プログラムに続き医学の視点を加味することで、映画を見直すきっかけを掴んだ。映画のどこかにこだわりを持てば、やがて作り手のこだわりを探り当てる喜びとなる。それがテレビにはない映画の楽しみであろう。映画はスクリーンで堪能しよう。そのあと、こだわりを確かめたい時に、好きなだけビデオ劇場にかじりつけばよい。

映画館は消え行くが、新しく登場した複合施設「シネマコンプレックス」などは、実に快適である。デジタル・インターネットの時代、映画の配信も近いと聞く。一体どんなことになっていくのやら、かつての映画少年は胸をわくわくさせている。

映画館は消え行くが、新しく登場した複合施設「シネマコンプレックス」などは、実に快適である。デジタル・インターネットの時代、映画の配信も近いと聞く。一体どんなことになっていくのやら、かつての映画少年は胸をわくわくさせている。

